

イラン、イスラエルそして中東

吉田 真人

イランにもイスラエルにも行ったことはないが、多少の個人的思い出がある。

1980年頃、会社の酒席でイラン石油化学プロジェクト（IJPC）の話題になった時、後輩が泣きだした。彼はIJPC建設支援のため、現地に派遣されたひとりであった。曰く「革命までは現地スタッフとは極めて良い関係で、彼らは技術の習得にも熱心、先生、先生と慕って来た。ところが革命と共に態度を一変し『米帝の手先、反革命の輩』と論難され、石を投げられた。この激しい落差にびっくりし、人間不信になった」。

2004年ドイツ勤務時。日本から特殊樹脂を輸入、現地で再加工、欧州一円や中東に販売していた。担当の部長が、販売契約更改の重要な時期なので是非イスラエルに出張したい、と許可を求めてきた。丁度運悪く、イスラエル空軍がハマス指導者を殺害し、双方の対立が決定的となった時期である。東京本社の「安全委員会」なる組織に許可を申請すべきものであるが、多分NOの返答が出るので、一計を案じた。現地判断で出張を許可、但し顧客にテルアビブ空港まで来てもらい、そこでの商談に限ることとした。無事商談が成立し部長も帰還してホットしたものである。

本来秘匿事項であるが、今や時効として許されるだろう？

“中東とは”という逸話を40年ほど前に初めて聞いた。未だに色あせていないのは困ったことだ。

一匹のサソリが川を渡ろうとしていた。しかし、サソリは泳げない。そこに同じく渡ろうとしていたカエルが現れた。サソリ「カエル君、向こう岸までおぶって運んでくれない？」カエル「いやだね、お前は俺を刺すに決まっている」、サソリ「君を刺したら俺は溺れて死んでしまう。そんなことするわけないだろう」。カエルは納得しサソリを背負って川を渡り始めた。丁度半ばに差し掛かった時、カエルは突然背中に鋭い痛みを感じた。「どうして刺した、お前も溺れて死ぬんだぞ」。サソリ「わかつてはいるが、やめられない、これが中東だ」。

（2025年7月12日）